

# 小学校低学年向け道徳副読本における「礼儀」の内容について

## On Content of Good Manners in the Sub-Textbook on Moral for Low-Grade Elementary School Students

柴崎 直人

Naoto SHIBAZAKI

本研究では小学校低学年の副読本における「礼儀」に関する教材内容の傾向を分析し、その扱いについて検討した。低学年向けの教材では「あいさつ」を基底とする言語活動とその充実への対応などの学習指導要領に沿った内容が示されたが、とくに2年生用の副教材では「動作」が減少し、3年生用の副教材においてもなお「あいさつ」を取り上げる傾向が強く見られた。これは低学年との連続性を意識したからとも考えられるが、礼儀を教えることはあいさつを教えることであるとの固定観念の強さや、適切な動作についての知識や技能を持たない実態に起因するとも考えられる。これは同時に児童生徒に「礼儀」の多様性に触れさせ『礼儀の大切さ』を実感させる機会を奪っているとも考えられる。このような固定観念の存在とその変容の必要性について、指導者は低学年の指導に際して留意すべきことが示された。また礼儀の教材については、礼儀の本質が時・場所・場合に応じて敬愛の念の表出形態を変容させるものであることをふまえて、単純に作法の型を提示したり「すべき集」「べからず集」として扱うのではないこと、などの点を踏まえた指導が求められることが示された。

キーワード：道徳、副読本、心のノート、礼儀、作法、マナー

### 1. 背景と課題

『相手の人格を尊重し、相手に対して敬愛する気持ちを具体的に示すことである』と学習指導要領解説道徳編にも示される<sup>(1)</sup>礼儀は、一般に対人関係の基礎とされ、社会生活を営む際の潤滑油とも称されることも多い。それだけに学校教育における「礼儀の学び」に対する社会的な需要も大きい。たとえば株式会社ユーキャンによる成人男女500人を対象とした第6回生涯学習実態調査(2007年11月実施)<sup>(2)</sup>によれば、「小学校で行われている通常の授業以外にどのような授業が必要だと思いますか」の設問に対する回答の一位が「礼儀・マナー」(71.6%)であった。この結果は学校教育をとりまく二つの現状が示されている。ひとつは学校の「授業」として礼儀・マナーが扱われていることについての一般人の認知の低さであり、もうひとつは、「小学校の礼儀・マナー教育は不十分」とする意識の高さである。回答者が「通常の授業」の文言を教科教育のみを指すと解釈しているとも考えられるが、いずれにせよ成人の7割強が礼儀・マナーの「授業」を求めていることは事実であり、教育上の課題として重視すべきであろう。

「礼儀」は学校教育では道徳の時間において扱う内容のひとつとして、平成20年に改訂・告示された小学校および中学校の学習指導要領第3章道徳の第2内容2の「主として他の人とのかかわりに関すること」(1)に明確に位置づけられている。

- 〔第1学年及び第2学年〕気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。
- 〔第3学年及び第4学年〕礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する。
- 〔第5学年及び第6学年〕時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する。
- 〔中学校〕礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる。

また、平成15年に文部科学省が全小中学校を対象に実施した道徳教育推進状況調査<sup>(3)</sup>では「特に重点を置いて指導している内容項目」について学習指導要領に示される道徳の15項目から5項目を選択させる設問が示された。そこから学習指導要領における礼儀の内容に該当する2-(1)を抽出して整理した結果を示す(表1)。

表1 「特に重点を置いて指導している内容項目」2-(1)を選択

学 年	順位(15項目中)	選択率
小学校1・2年	4位	54.8%
小学校3・4年	8位	29.6%
小学校5・6年	8位	26.0%
中学校1年	5位	37.2%
中学校2年	6位	29.4%
中学校3年	9位	25.7%

平成15年度道徳教育推進状況調査(文部科学省2003)より作成

この表から、小学校・中学校ともに、2-(1)礼儀に重点を置いて指導している学校は、入学の時期が最も多く、卒業に向けて徐々に少なくなるという傾向が伺える。

とくに小学校1・2年-3・4年間と中学校1年-2年間の減少傾向が、小学校3・4年-5・6年間と中学校2年-3年間のそれよりもそれぞれ大きい点が特徴的である。小学校1・2年-3・4年間では25.2ポイント減であるのに対して、小学校3・4年-5・6年間3.6ポイント減である。また中学校では、中学校1年-2年間では7.8ポイント減であるのに対して、中学校2年-3年間では3.7ポイントの減となっている。

このような傾向がみられる2-(1)「礼儀」について、道徳の授業ではどのような内容が扱われているか。同じく平成15年度道徳教育推進状況調査によれば「道徳の時間の指導に使用する教材」<sup>(4)</sup>として、小中ともに1位が「こころのノート」<sup>(注1)</sup>で2位が「民間の教材会社で開発・刊行した読み物資料」(いわゆる道徳副読本)であった(表2)。

表2 「道徳の時間の指導に使用する教材」

指導に使用する教材	小学校	中学校
「こころのノート」	97.1%	90.4%
「教材会社による読み物資料」 (道徳副読本)	81.5%	70.8%

平成15年度道徳教育推進状況調査(文部科学省2003)より作成

このように教科書の存在しない道徳の時間の指導では、とくにこの2種の教材が用いられていることが伺える。

以上の背景から、本研究ではとくに小学校低学年で用いられる道徳副読本及びこころのノートに注目し、その内容分析を行う。また中学年である3年生用の副教材の内容との比較を通して、低学年における道徳教育副教材の特徴を明らかにするとともに、学校教育に求められている礼儀とその在り方について考察し、今後の教材開発に資することを目的とする。

## 2. 分析方法

道徳副読本を出版する8社<sup>(注2)</sup>の東京で使用されている道徳副読本およびこころのノート、計9種類の副読本および副教材(以下「副教材」)において1、平成22年度に刊行されている小学校1年生から3年生までを対象とするもののうち、発行者によって「礼儀」として示される教材を抽出する。

そのうえで学習指導要領の記述に基づく分類項目を設定し、各教材について分析する。ここでは教材を用いる教師に依存せざるを得ない指導法や指導内容は対象とせず、純粋に教材上に明示される情報のみによる分類を行

うものとする。

それらの結果を整理・統合した結果をもとに、道徳副教材における内容の方向性を示す。

## 3. 分析結果

### a) 道徳副読本における「礼儀」の教材

各道徳副読本が学習指導要領に対応するために、1・2学年においては気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接することについて、続く3・4学年においては、礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接することについての教材選定がなされている。これら内容をそのまま分類項目として教材内容の分類を行い、各教材の特徴を明確に示し、全体の傾向を導いた。

具体的な分類項目については、小学校1・2年においては「気持ちのよいあいさつ(表では『挨拶』と表記)」「言葉遣い(同『言葉』)」「動作」の3項目が、3年ではそれに加えて「礼儀の大切さ(表では『大切さ』と表記)」「真心をもって接する(同『真心』)」の2項目が挙げられた。ここではそれらをあわせた5種の内容項目「挨拶・言葉・動作・大切さ・真心」を設定し、各教材について検証した。

### b) 小学校1年生

表3 1年生道徳教材「礼儀」内容

挨拶	言葉	動作	大切さ	真心	資料名	出版社
○	※	○			あいさつ	大阪書籍
○	○	○			「ありがとう」「ごめんなさい」	大阪書籍
○	○	△			あかるいあいさつ	学習研究社
○	○			○	かめさんありがとう	学習研究社
○	※	○			あいさつ	学校図書
○	○				おおきなこえでいえるといいな	学校図書
○	※	○			ともだちのいえで	教育出版
○	○				ありがとう(外国語)	教育出版
○	○	○		○	あいさつで しあわせに	光文書院
○	○	○		○	だいじなわすれもの	光文書院
○	※	○			あいさつ	東京書籍
○	○	○		○	やぎさんのたんじょうび	東京書籍
○	○	○			あいさつゲームをしましょう	東京書籍
○	※	○			みんなといっしょ	日本文教出版
○	○	○			山の学校のあさ	日本文教出版
○	※				おはよう	光村図書
○	○				オアシス あいさつ	光村図書
○	○				あいさつはこころのリボン	こころのノート
○	○				じょうずにあいさつできたかな	こころのノート

(○)は教材上に明示されているもの

※は直接は示されないが、絵などを手がかりに考えさせる内容であるもの

△はいわゆる「礼儀正しい」とは判断できない動作が示されているもの

〔1年生教材について〕

すべての教材が「気持ちのよいあいさつ」をふまえた内容である。言葉をわざと書き込まないままのさまざまな挨拶場面をイラストで提示しておき、どのような言葉がそこでは適切であるかを児童に類推させる、という形式の教材が全体の31.6% (6件) を占める。「動作」については具体的な方法や仕草の手順、作法などの指示は全種において皆無であり、そのすべてがイラストにおいて両手を揃えて状態を前傾させる「立礼」が図示されるにとどまっている。

中学年の内容項目である「礼儀の大切さ」はこの段階で示されていないが、誰に対しても真心を持って接することについては、その主題に直接迫るものは見られないものの、21.1% (4件：動物を用いた寓話と他家訪問時のエピソード中) にその要素を認めることができる。

c) 小学校2年生

表4 2年生道徳教材「礼儀」内容

挨拶	言葉	動作	大切さ	真心	資料名	出版社
○					たけしの でんわ	大阪書籍
○	○				あはようっていいな	大阪書籍
○					あいさつが きれいな 王さま	学習研究社
○	○	○		○	ぼっかぼか	学習研究社
○	○				まいちゃんのえがお	学校図書
○	○				こんなときなんていう?	学校図書
○	○	○			あいさつ	教育出版
○	○				おもいきって いってごらん	光文書院
○	○	○	○		あいさつって なあに	光文書院
○	○				うれしい気持ち	東京書籍
○	○				「あいさつ」っていいな	東京書籍
○	○				あいさつがきれいな王さま <sup>(注3)</sup>	日本文教出版
○	○				いいにくかったことば	日本文教出版
○	○		○		なんかへん	光村図書
○	○				あいさつってふしぎ	光村図書
○	○				あいさつはこころのリボン	こころのノート
○	○				じょうずにあいさつできたかな	こころのノート

(○は教材上に明示されているもの)

〔2年生教材について〕

1年次よりも寓話的な教材が減少し、具体的な言葉を示しつつ挨拶をしよう、挨拶をすると気持ちがいい、と訴えるものが増加している。

またイラストも1年次より「丁寧なお辞儀」を示すものが見られなくなっているため、「動作」の項目が全教材中の17.6% (17件中3件) と少ない結果となっている。

つまり1年次と比較して動作よりも言葉と気持ちに重点が置かれていることになる。

これらの教材のなかでは光村図書の「なんかへん」(編

集員会作) が特徴的である。

他の教材が望ましい挨拶および正しい言葉づかいを示すにとどまっているなかで、あえて「慇懃無礼な友人の言動」を「なんか へん」と指摘することで「正しい言葉・挨拶」と「ほんとうの礼儀正しさ」について考えることができるようになってきている。

このように、1・2年生を対象とした「礼儀」の教材においては、①挨拶をすること、②正しい言葉を用いること、③挨拶をすると気持ちが良いこと、が学びの中心となっており、動作については直接的に示されることはなく、すべてイラストのみにとどまっている。

また2年になるとそれも減少し、動作について示されることがきわめて少なくなることがわかる。

d) 小学校3年生

表5 3年生道徳教材「礼儀」内容

挨拶	言葉	動作	大切さ	真心	資料名	出版社
○	○	○	○	○	しつれいおばさん	大阪書籍
○	○		○		「ありがとう」ということば	大阪書籍
○	○	○	○	○	しつれいおばさん	学習研究社
○	○				エチケットしんだん	学習研究社
○	○				あいさつは大きな声で	学校図書
	○			○	ことばのまほう	学校図書
○	○	○	○	○	心のことば	教育出版
	○			○	かりたかさ	教育出版
		○	○	○	生きたれいぎ	光文書院
		○	○	○	「テーブルマナー」ってどんなこと?	光文書院
○	○	○	○	○	電話のおじぎ	光文書院
○	○		○		あいさつをすると	東京書籍
○	○				さいこうにうれしい「おはよう!」	東京書籍
○		○	○		インタビューに出かけよう	日本文教出版
○	○	○			さあ、お上がり	日本文教出版
○		○	○		いろいろなあいさつ	光村図書
	○		○	○	心をかえる一言	光村図書
○	○	○	○	○	礼ぎ	心のノート
○	○				心がかよいうあいさつの言葉	心のノート
○	○	○			礼ぎ正しいわたしをめざしてゴー	心のノート

(○は教材上に明示されているもの)

〔3年生教材について〕

1・2年生の副読本における教材の内容は、学習指導要領に示されるとおりの挨拶を中心とするものであった。

3年生の学習指導要領における「礼儀」の内容は、「礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する。」であり、「礼儀の大切さ」と「真心」がキーワードとなっている。教材においても「礼儀の大切さ」が60.0%、「真心」が50.0%とそれぞれ教材上に明示されている。

また、1・2年生において主要な内容として取り上げ

られなかった「動作」が採用されていることが認められる。しかし教材の主たる内容としては20件のうち挨拶が75% (15件)、言葉が80% (16件) で全体の多くを占めていることが明らかとなった。

#### 4. 考察

1年生の副教材19件中6件(31.6%)においては、適切な言葉を児童に類推させる教材を採用している。これは副読本9種中6種(66.7%)を占めており、小学校学習指導要領第3章2-(1)〔第1学年及び第2学年〕に示される『気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。』の「あいさつ」「言葉遣い」という言語活動とその充実に向けて対応したものである。

2年の副教材では、学習指導要領に示される「気持ちのよい」という感情に焦点を当てて、具体的な言葉を示して挨拶をすると気持ちがいい、と訴える教材が増加している。つまり1年次と比較して動作よりも言葉と気もちに重点が置かれている。これは指導要領解説に示される、『この段階においては、特にはきはきとした気持ちのよいあいさつや言葉遣い、動作などの具体的な指導を通して明るく接することのできる児童を育てることが大切である。』を的確に踏まえているといえよう。

##### a) あいさつ

1・2年の副教材で挨拶をテーマに採用するのは指導要領に示されている以上、当然である。ところが3年の副教材においても、9種すべての副読本で礼儀の内として「あいさつ」を取り上げている。

学校図書の教材「ことばのまほう」では「ごめんね。ほんとうにごめんね」「ひろってくれてありがとう」、「かりたかさ」には「おそくなって、ごめんなさいね」というお礼と謝辞が出てきているが、それぞれ挨拶には含めなかった。これを挨拶、と換算すると20教材中の17教材が挨拶に関するものとなり、3年生になってもなお85%の教材が「礼儀」で「挨拶」を取り上げ続けていることになる。多くの副読本が礼儀に関する教材を2件採用する中で、光文書院においては礼儀関連の教材を1件増加して3件にしてまで「あいさつ」について触れている。

第3学年及び第4学年の学習指導要領本文では『礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する。』とあり、かならず挨拶について触れねばならないとの記述は見られない。第3学年及び第4学年の指導要領解説においては『この段階においては、児童は相手の気持ちを自分におきかえて自らの行動を考えることができるようになってくる。例えば、あいさつや言葉遣いなど、相手の気持ちに応じた対応ができるようになる。そのことを十分考慮して、礼儀の大切さを指導する必要がある。』とあり、あいさつの語はみられるが、これは例示である。

ここで重要なのは『相手の気持ちを自分におきかえて自らの行動を考えることができる』ことであって、それが「挨拶」である必要はない。

しかしまた、そこまで挨拶について言及せざるを得ない日本の教育の現状も考慮すべきであろう。これほど取り上げざるを得ない状況としては、次のような事情が考えられる。

- i) 例示といえども指導要領解説に示されているため
- ii) 児童生徒がいくら指導しても挨拶ができるようにならないので反復する必要があるため
- iii) 挨拶のできる人間に育ててほしいという社会の要請に手厚く応えようとしているため
- iv) 挨拶のほかに礼儀を教えるための適切な材料を考えたかないため

指導要領解説の例示が「あいさつ」「言葉遣い」であることは第1学年及び第2学年の学習指導要領本文からの連続性を意識しているのであろう。しかしそれだけに、繰り返して教材のテーマとして扱うのはかえって「礼儀」が関与する場の社会における多様性を示す機会を奪い、『礼儀の大切さ』を実感する機会を失っているともいえる。

『あいさつや言葉遣いなど』は日常生活の中で意識して指導すればよいことであり、道徳の時間においては例えばテーブルマナーをテーマとする光文書院の「生きたれいぎ」のように、他の「礼儀」の内容を取り上げるべきである。

児童生徒への指導については、学校における繰り返しの指導のほかに、保護者および地域との連携が不可欠である点を再認識しなくてはならない。挨拶は礼儀であるが、生活習慣の一面をも併せ持つからである。

礼儀に関する社会の要請は、当然ながら挨拶ができるように育てるだけではなく、社会生活全般における対人コミュニケーション全般にわたる「生きる力」を期待するものである。だからこそ、「生活」における礼儀の多様性を早期に認識させることで、日常生活においても他者の人格の尊重や敬愛の念の提示が重要であることを示しておくべきである。

礼儀への意識については、年齢が低いほど礼儀への関心が低く、価値がなく、閉塞的なイメージを持つことが明らかになっている<sup>(5)</sup>。それだけに学校教育で「礼儀は日常のものである」と意識して繰り返し提示し続ける必要がある。

懸念すべきは挨拶の他に礼儀を教えるための適切な材料を持たない場合である。実際には礼儀の内容は表6のように139項目にもなり、内容も多岐にわたる<sup>(6)</sup>。

このような多様性を持つにもかかわらず、礼儀＝あいさつという構図を導く遠因は、礼儀作法は特別な場合の特別なやりかたであって日常のものではない、という固定観念にあると考えられる。

また、先に挙げた道徳教育推進状況調査の「特に重点

表6 礼儀の内容

大項目	中項目	小項目(数)
[かんがえる]	○マナーの原理	1
	○マナーの歴史	1
[ふるまう]	○基本動作(立居振舞い)	5
[もてなす]	○訪問	22
	○贈答	11
	○食事	19
[つたえる]	○会話(電話)	5
	○手紙(メール)	7
[つくる]	○折形(祝儀・不祝儀包み等)	8
	○組紐(紐結び)	2
[うけつぐ]	○年中行事	5
	○慶事	12
	○弔事	5
	○人生儀礼(等伝統行事)	12
[かかわる]	○公衆マナー	10
	○国際儀礼(プロトコール)	4
	○ビジネスマナー	10
合計		139

(柴崎(2002)「マナー・礼儀作法の教育における1年間カリキュラムの構築」より作成)

を置いて指導している内容項目」において2-(1)礼儀が初年度で最も高く、学年が進むにつれて低下していく現象も、初年度が「あいさつ」をとくに引き上げて扱う頻度が高いことに起因するものと考えられる。礼儀のジャンルにおいてあいさつが他の手がかりと同様であるとの認識があれば、このようなデータの変化は生じないはずだからである。ここからも礼儀=あいさつという教育関係者の意識の強さを確認することができる。

礼儀は上述のように社会生活全般における対人コミュニケーション全般にわたるものであるため、礼儀を教えること=挨拶を教えることという固着した概念の変容、いわば「あいさつ病」からの脱却が、今後は道徳教育に関わる側において必要であろう。これは3年生の指導のみならず、低学年の指導においても踏まえておくべきである。それがあってはじめて指導者の中に「あいさつ」が位置づけられ、6年間を通した適切な指導の礎となることが期待できると考えられる。

### b) 動作

また、これら指導要領の内容項目および指導要領解説の解説文に示されているにもかかわらず、副教材中に引き上げられることが少ないのが「動作」である。

1・2年生を対象とする教材は学習指導要領を踏まえた①挨拶をすること、②正しい言葉を用いること、③挨拶をすると気持ちが良いこと、が教材として示されているが、動作については直接的に示されることはなく、すべてイラストのみにとどまっている。また2年になると

それも減少し、動作について示されることがきわめて少なくなることがわかる。

平成20年の学習指導要領の改定に際しては、同年の中央教育審議会答申における「自分や他者の感情や思いを表現したり、受け止めたりする語彙や表現力が乏しいことが、他者とのコミュニケーションがとれなかったり、他者との関係において容易にいわゆるキレてしまう一因になっており、これらについての指導の充実が必要である。」<sup>(7)</sup>との現状を踏まえて、コミュニケーションや感性・情緒の基盤としての言語活動の充実が示された。そこでは道徳における言語の役割は、コミュニケーションや感性・情緒の基盤と指摘され、例として「討論・討議などにより意見の異なる人を説得したり、協同的に議論して集団としての意見をまとめたりする」が挙げられている。

コミュニケーションにおいて、自身の感性や情緒を伝達する手段は、いわゆる「ことば」だけではない。Mehrabianは他者から感情や態度について矛盾したメッセージが発せられたとき、人が相手の感情を判断する手がかりとして用いられる材料として、言語情報(Verbal)が7%、聴覚情報(Vocal)が38%、視覚情報(Visual)が55%であり、言語情報よりも聴覚情報および視覚情報をより重視することを明らかにしている<sup>(8)</sup>。つまり言語情報と非言語情報が矛盾する場合には、人間は言語よりも非言語の情報を判断のよりどころとするのである。ここからも、「ことば」や「言葉遣い」という言語情報だけでなく、学習指導要領に示されるような「気持ちのよい」表情や音声や動作、「明るい」表情や音声や動作、といった非言語的な伝達手段が重要であることがわかる。

ところが、教材中に示されるのは気持ちのよい「表情や音声」ばかりであって、「動作」ではない。

イラストに示される挨拶は、大きく二分される。ひとつはこやかに手を挙げたり、振ったりして挨拶をするものである。もうひとつは両手を体の前面で揃え、上体を傾けて挨拶をするものである。

単に気持ちのよい挨拶を示すなら、笑顔で手を振る挨拶でも問題はない。しかし指導内容の連続性や社会の要請を考慮に入れるならば、後者のような「日本の伝統文化」に倣った挨拶を提示するほうが社会的にも望ましい。

両手を揃えて前傾する児童のイラストは伝統文化の「立礼」にあたるが、ここで図示されているのは立礼の形のみであり、「動作」でも一定の動作を規程した「型」でもない。この点はきわめて重要である。

また、3年生の教材において、動作と真心の関係が引き上げられているのが光文書院「生きたれいぎ」である。「電話のおじぎ」においても電話口でお辞儀をする所作と心の伝達について示されるが、それらは真心について考察するための手がかりとして示される動作であって、

必ずしも社会的に積極的に求められる望ましい非言語的な動作や形が示されているものではない。

ただひとつ「動作」に言及している教材が、教育出版の「心のことば」である。そこでは、主人公が横断歩道で待っているときに車の運転手が目と手で「どうぞ」という合図をしてくれた、という記述が見られる。しかしそこでもどのような目の合図や手の形、指し示し方が望ましいのかは示されない。これが企業のビジネスマナー研修であれば、一定の型を伴った理論および技能の指導がなされるのが一般的である。

以上のように、「動作」を教えなくてはならないのに教材には形だけ、それもきわめて不十分なものしか示されていない。ということは、連続した動きを伴う「動作」やそれに伴う望ましい非言語的な伝達様式は、教員が自ら考え出して範を示さなくてはならないということにはかならない。

その場合には、「望ましい動作」はどのようなものであるのか、そしてなぜそれが望ましいと判断できるのか。この2点についての知識と技能を教員が習得しておかねば、児童生徒に十分な指導をすることはできないだろう。ところが、その手がかりとなる情報は、教材上には一切示されていない。

挨拶は大切である。では、どのような挨拶が「大事」にふさわしいのか、なぜそれがふさわしいといえるのか。それを教員が知り、児童生徒に伝えねばならない。その場合には、学年進行とあわせて段階を経る指導形態においても、「正しい挨拶の理由と方法」を初期から教えるべきである。

たとえば立礼(お辞儀)は、日本の伝統文化のひとつの象徴であり、低学年からその意味とやり方を指導しておくことで、さまざまな学びに展開できる。日本のコミュニケーション文化の特徴である、言語より非言語を尊ぶことや、非接触型であること、また異文化の礼である握手との対比やそれぞれの文化の尊重、といった学びを導くことが可能となる。低学年ではお辞儀の動作と形を、中学年でまごころと併せてお辞儀という挨拶の意義を学習するという流れであるのが望ましいであろう。

しかし現行の教師教育カリキュラムには、児童生徒を教育するために習得すべき礼儀作法も、その型(動作)の内容も一切認められない。

現状では教員個人や各学校の管理的立場にあるものが正しいと思う「礼儀作法」を自由に教えているのである。社会が学校に強く求めているものを、何のガイドラインも手がかりもないまま「学校で教える礼儀作法」としてしまっている。

これでは「礼儀」に親しくない教員や教材作成者がいたとした場合に、何の手がかりも持たないまま、当人がこれまでの人生でたまたま出会ってきた「礼儀」だけを示すにとどまることになりかねない。日常のほとんどすべてが礼儀の対象であることに気づかないまま、「挨拶」

だけを示すしかないだろう。

このような状況を想定するならば、児童生徒にしてみれば礼儀作法は「挨拶」くらいしか習った覚えがない、となるのも当然であり、そのほかには部活動の先輩にあいさつと敬語を強要されたという印象を残す程度でしかなくなるであろう。そして社会人となってから、あらゆるコミュニケーションにビジネスマナーや礼儀作法の知識と技能が求められるという事態に直面した挙句、学校の授業に取り上げてほしいナンバーワンが「礼儀作法」という要請につながることになるのであろう。

前述のように、もし作法の「型」の構造や望ましい動作の詳細が具体的に教材に示されないならば、各教員が相応の知識・経験で指導案を作成し、児童生徒に示す必要がある。教員ごとにその線引きがバラバラであれば、小・中・高と連続した「礼儀」の指導は実現しない。そのため教師教育においては最低限度の「共通の望ましい動作・仕草の原理及び構造に関する知識・技能」が習得可能なカリキュラムが不可欠かつ急務であるといえる。

このように現行の教師教育カリキュラムに「礼儀」を加えること、そして礼儀に関する教材を多様化・適正化することが、社会の要請に応えるためにも必要なのである。

### c) 教材の扱いの留意点

望ましい知識と技能を備えた教員が礼儀の副教材を用いて指導する際に留意すべきことがある。単に「きまりごと」を示すことに終始してはならないということである。

礼儀の指導を受けることに関して一般に存在する抵抗感は、自身の自由意思を否定される(と思込んでしまうような)「べからず集」の条文提示に終始するというイメージに由来することが多い。

「〇〇してはなりません」という指導は、指摘としては正しいが、指導を受けるものにとっては自我の否定に直結することになりかねないため、礼儀に関する指導の手がかりとしては望ましいとはいえない。ここでは日本文教出版の3年生用教材「さあ、お上がり」を例に考察する。近所に住む「川本さん」というおじいさんが、元気にあいさつをすること、靴の向きを直すこと、いただきますの挨拶をすること、話をさえぎってはいけないことについて、「エチケット、エチケット」と言いながら教えてくれる話である。

この教材において、挨拶については「元気よくあいさつをしないと1日頑張れないし、こちらまで元気がなくなってしまう」とおじいさんの言葉によって説明がなされる。

しかし学習指導要領における挨拶は「気持ちのよい」「明るい」、学習指導要領解説では「はきはきとした」と述べられており、これは「元気に挨拶しなくてはいけない」ということではない。相手に対して明るくはきはき

とした挨拶で気持ちよく伝わるのが大事なのであって、元気よく挨拶「しないといけない」ことではない。

ここで示される価値観は「元気のよいあいさつは良い」のであり、そうでない挨拶は「1日頑張れない」「こちらまで元気がなくなる」ということである。つまり価値の低い行為だということになる。

この登場人物は、挨拶をしないと1日頑張れない、のではなく、「元気にしないと頑張れない」といっているだけである。ここにあるのは単に気力の充実に関する自分の好みを押し付ける行為であって、挨拶の本質に向かう示唆ではない。

挨拶は相手の人格の尊重と敬愛の念を示すためにおこなうものである。相手を無視することなくきちんとその存在に気づいていること、さらに敬意を持っていること、それを言語的・非言語的に伝達する意思があり、積極的に示そうと試みること、それをその場にふさわしい方法で表出すること。以上の過程を経ることで、相手にとって望ましい挨拶として伝わるのである。

この前提が確実に教員と児童の中であって、そのうえでおじいさんの好みも、「元気のよい挨拶」であり、その嗜好に応じて児童は元気な挨拶を表出すべきなのである、という解釈に導かれれば学習指導要領の〔第3学年及び第4学年〕における『例えば、あいさつや言葉遣いなど、相手の気持ちに応じた対応ができるようになる。』に対応した望ましい学びとなる。

しかし現実的には1・2年生において挨拶の本質に触れてこなかった児童がいきなり一足飛びにそこに到達することはきわめて困難であろう。

ここで示されるのは「元気のよくない挨拶はすべからず」との価値観を持ち、こちらまで元気がなくなってしまうから、と自分の気分を良くするために他者に元気のよい挨拶を強要する大人の姿である。

さらにこのおじいさんは作中で、玄関の靴についても、「どうだ、きれいに揃っていると気持ちがいいだろう」、ジュースを飲もうとして「食べ物やのみものをごちそうになるときは、『いただきます』というもんだ」、話の途中で何かたずねようとする「ひとの話はさいごまでしっかり聞いてから、たずねたり、わからないところはしつもんしたりするもんだよ」と次々と指摘する。この指摘はマナー的には正しいのであるが、なぜそうするのかは一切示されないまま、「ハッハッハ。エチケット、エチケット」が繰り返される。

前述のように自分が気持ちよくないから、ということで、他者の感情の付度をテーマとして創作がなされており、作中でおじいさんが驍の一環としてこれらの言葉を用いて指導しているという構造は理解できる。しかし文中には「エチケットを守らなくてはね」とあるだけで、なぜ守らなくてはならないかの手がかりは、川本さんというおじいさんの個人の感情しか存在しないため、この作品はおじいさんの編纂した「すべき集」「べからず集」

になっている。読み手である児童の視点においては、エチケットというものは、このように「それを知っているという強い立場に居る者」が、「自分の負の感情を払拭するため」に「他者に心遣いを強要する」、との誤解を招く恐れがある。教員はこの点に留意して指導計画を立てないと、かえって児童生徒における礼儀への抵抗感を強めてしまうことになりかねない。

発達段階に応じて便宜的にこのような上意下達形式の教材を選択しているということもあるかもしれない。しかし礼の本質はTPO(時・場所・場合)に応じて敬愛の念の表出形態を変容させることであり、この教材のように単純に型を提示するだけではかえって「礼儀作法は固着した型の提示にすぎない」、との誤解を生じる可能性がある。

作品の末尾に「朝のあいさつに元気がないとき、よびとめてちゅういしてくださった川本さんの気持ちも、わたしははじめてわかったような気がしました。」と作中に登場する児童の述懐があるが、挨拶に元気がない児童を呼び止めた大人がすべき行為は相手の健康の心配であって、自分が気持ちよくなる挨拶の強要ではないだろう。

この教材で示されるところのおじいさんは、ともすれば礼儀そのものに対して児童に誤解を抱かせかねない、危うい存在である。この類の教材を用いる際には、以上を踏まえたうえで指導案を作成する必要がある。

## 5. まとめ及び今後の課題

1年生用の副教材における「礼儀」の内容は、気持ちのよいあいさつを基底にしつつ、その言葉を児童に類推させるなど、言語活動とその充実に対応したものとなっている。2年生用の副教材では、学習指導要領に示される「気持ちのよい」という感情に焦点が当てられ、1年次と比較して動作を扱う教材が減少し、それよりも言葉と気持ちに重点が置かれる傾向がみられた。

しかし3年生用の副教材においてもなお「あいさつ」を取り上げる傾向が強くなる。これは指導要領解説の例示が「あいさつ」「言葉遣い」であることから低学年の内容との連続性を意識しているとも考えられるが礼儀＝あいさつとする固定観念の強さや正しい動作についての知識や技能を持たないことに起因した傾向であるとも考えられる。

またこの傾向は、児童生徒に「礼儀」の多様性に触れさせ『礼儀の大切さ』を実感させる機会を奪っているとも考えられる。

礼儀の内容は139項目の多岐にわたり多様性を持つが、この礼儀＝あいさつという固定観念は広くみられる。小学校・中学校ともに、「礼儀」に重点を置いて指導しているとする学年は入学初年度が最も多く、卒業に向けて徐々に少なくなるという現象も、これに起因する

と考えられる。

しかし礼儀は社会生活全般における対人コミュニケーション全般にわたるものであるため、礼儀を教えること＝挨拶を教えることという固着した概念の変容(「あいさつ病」からの脱却)こそが、3年生のみならず低学年の指導においても踏まえておくべきことである。

これがあってはじめて指導者の中に「あいさつ」が位置づけられ、6年間を通した適切な指導の礎となすことが期待できる。礼儀の教材は、以上を踏まえて扱うべきであり、そのためにも教師教育カリキュラムに「礼儀」を加え、礼儀に関する教員の知識及び技能の習得をはかる必要がある。

また教育の現場では、礼の本質がTPO(時・場所・場合)に応じて敬愛の念の表出形態を変容させることであり、単純に作法の型を提示するだけではかえって誤解を生じる可能性があること、よって「すべき集」「べからず集」として扱うのではないこと、などの点に留意した指導が求められるであろう。

今後は中学年・高学年の道徳副読本における教材の内容分析を経て、道徳副読本における礼儀の扱われ方の適正化に向けた研究を進め、道徳教育のいっそうの発展に寄与したいと考えている。

## 【引用文献】

- (1) 小学校学習指導要領解説 道徳編 2008 文部科学省
- (2) 第6回生涯学習実態調査 2008 株式会社ユーキャン 報道資料
- (3) 平成15年度道徳教育推進状況調査結果 2003 文部科学省 pp38-43
- (4) 同上 p37
- (5) 柴崎直人(2004) 青少年女子の礼儀作法教育の留意点 -イメージの比較による考察-, 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要 第4号
- (6) 柴崎直人(2002) 「マナー・礼儀作法の教育における1年間カリキュラムの構築」 日本道徳教育学会 道徳と教育 No.312・313 47/1, pp287-304
- (7) 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申) H20 中央教育審議会
- (8) Mehrabian, A. (1971). Silent messages. Wadsworth, Belmont, California

## 【注記】

(注1) こころのノートは副読本ではなく副教材の位置づけであり、また小学校1・2年以外では「心のノート」と表記される。

(注2)

『しょうがくどうとく いきる ちから1年』大阪書籍

『小学どうとく 生きる 力 2年』大阪書籍  
『小学どうとく 生きる力 3年』大阪書籍  
『みんなのどうとく1年-6年』学研  
『道徳 かがやけみらい 1年-6年(東京都版)』学校図書  
『小学道徳 新版 心つないで 1年-6年』教育出版  
『新しい道徳 ゆたかな心 1年-6年』光文書院  
『どうとく1 みんななかよく』東京書籍  
『どうとく2 みんなたのしく』東京書籍  
『どうとく3 明るい心で』東京書籍  
『どうとく4 ゆたかな心で』東京書籍  
『道徳5 希望を持って』東京書籍  
『道徳6 明日をめざして』東京書籍  
『道徳 あすをみつめて 1年-6年』日本文教出版  
『道徳 きみがいちばんひかるとき1年-6年』光村図書  
『こころのノート 小学校1・2年』文部科学省  
『心のノート小学校3・4年』文部科学省  
※なお、他に愛知県教育振興会、京都府教育委員会、文教社(低学年向けのみ)文溪堂および日本標準の副読本がある。

(注3) 学習研究社の教材では、「はやしたかし作『あいさつがきらいな王さま』による」とあり、日本文教出版の教材では「もりけん作による」とある。どちらもひかりのくから出版されているが、出版年度により作者等表記に違いがある。

『あいさつがきらいな王さま』もりけん(作)、はやしたかし(文)、あべはじめ(絵)1985年 ひかりのくに

『あいさつがきらいな王さま』はやしたかし(文)、あべはじめ(絵)1994年 ひかりのくに

※あらすじは同じであるが、日本文教出版の教材のほうが具体的な挨拶の言葉や登場人物の心理描写などが細かく記述されている。